

ブルネイの人々がめざす新しい経済

—イスラーム金融に寄せられる期待を描く—

上原 健太郎*

東洋のベニス、東南アジア随一の産油国、専制君主による統治…。このように表現されることの多いブルネイ・ダルサラーム（以下、ブルネイ）は、ボルネオ島の北西部に位置し、日本の三重県程度の面積をもつ東南アジアの小国である。国名の一部であるダルサラームは、アラビア語で「平和の館」を意味する。

ブルネイは1888年に英国の保護領となり、その後1984年に完全独立を果たした。国教はイスラームであり、人口の約80%はイスラーム教徒（ムスリム）が占めている（2011年の公式統計による。以下同様）。

その経済構造は石油と天然ガスによる鉱業が中心であり、日本との経済交流も活発である。2011年におけるブルネイの輸出総額の約43%は対日輸出であり、特に輸出された天然ガスの約90%は日本向けである。しかし、近年のブルネイ経済は、鉱業のみではなく、その国教であるイスラームの理念にもとづくイスラーム経済の活況でも知られるようになってきた。その具体例が、イスラーム金融である。イスラーム金融は、国内の金融部門において影響力をもち、さらにムスリムの生活と深く関わっている。

ブルネイのイスラーム金融は、1990年代からその取り組みが始まり、現在では2つの金融機関が業務を行なっている。国内市場におけるこれらの金融機関のシェアは、4割に迫る勢いである。

国内初のイスラーム金融機関であるブルネイ・イスラーム信用貯蓄公社（以下、貯蓄公社）は、設立された1991年から現在に至るまでムスリムの貯蓄や資産運用を中心にサービスを提供してきたことで知られる。人材開発部門の女性役員は、貯蓄公社が銀行という形態をとらずに独自の発展を遂げたとして、その社会的意義を自信たっぷりに私に話してくれた。特に彼女は、貯蓄公社の設立目的、また主要な受信業務のひとつとして、ムスリム向けの巡礼用貯蓄預金の提供を挙げた。聖地マッカへの巡礼はイスラームの宗教的義務のひとつであり、ブルネイ社会においても重要視されている。貯蓄公社は、国内で高まる巡礼熱に呼応するように成長してきたのである。

もうひとつのイスラーム金融機関で、国内最大規模の資産額を有するブルネイ・ダルサラーム・イスラーム銀行も人々の経済生活に大きな役割を担っている。写真2は、首

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真1 首都バンドル・スリ・ブガワンにあるブルネイ・イスラーム信用貯蓄公社

都バンドル・スリ・ブガワン随一の商業地区であるガドンの総合ショッピングモール、ザ・モールのATMである。外資系のスタンダード・チャータード銀行、先述の貯蓄公社のATMが立ち並ぶ中、同行のATMの前に大勢の人々が行列を作り並んでいた。その他にも、バンドル・スリ・ブガワンの飲食店などでは、同行のカードや携帯電話による決済サービスを使用できる旨を示したポスターが目に入ってきた。実際、私が現地で用いたプリペイド式携帯電話の支払いを行なう際、ブルネイ・ダルサラーム大学の院生である友人が、スマートフォンによるネットバンキングのサービスを用いて支払いを立て替えてくれた。

金融商品の中で、特に私の目を引いたのがラフンであった。端的に言えば、ラフンとはイスラームの教えに沿った質のことである。通常の質では、借り手が融資を受ける際、質屋が査定した品物の金額に対して、利率が決定される。しかし、イスラームでは利子を取



写真2 商業が盛んなガドン地区にあるザ・モールのATM

ることが禁じられているため、事情は異なる。ラフンの場合、借り手の所有物の価値自体に対して、それを維持・保管するための管理料を取るようになっていいる。このラフンは近年ではマレーシア、ブルネイなどの東南アジア諸国において活発に取引が行なわれているという。

ブルネイのラフンは、1996年から導入が始まり、現在ではバンドル・スリ・ブガワンと商業都市セリアにて提供されている（写真3はバンドル・スリ・ブガワンのラフン）。借り手が質に入れるのは、ネックレス、ブレスレット、イヤリング、アンクレットといった、金やダイヤモンドの装飾品である（写真4）。そのため、ラフンの顧客は主に女性が多いが、男性も妻や母親などの親類から上の装飾品を借りて、ラフンを利用する事例もみられるという。

ラフンは、ブルネイの人々の経済生活に深く関わってきた。ブルネイでは毎年、国王の誕生祭が行なわれ、そこでは現地の人々によって多くの屋台が出店される。加えて、ム



写真3 首都バンドル・スリ・ブガワンにあるラフン

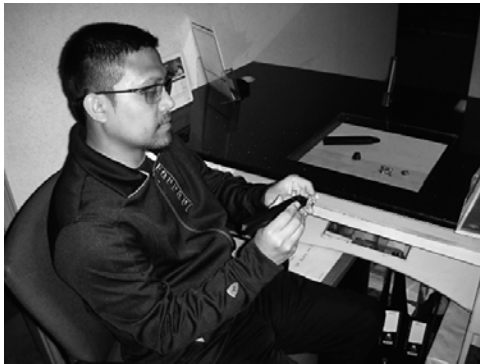


写真4 質物であるダイヤモンドの質量を計るラフンの従業員

スリムの信仰行為である断食が行なわれる際にも、飲食物を提供する屋台が期間限定で出店されるという。それらの開業資金にラフンで借りたお金が当てられるのである。

社会生活においてもラフンは活用されている。そのひとつが、ブルネイ社会にとって重要な行事である結婚式である。ラフンは、結婚式費を賄うために利用されるが、それだけに限らない。ブルネイの慣習では結婚式の際に新郎新婦へ金が贈られることがあり、彼らが後にラフンを利用する事例に繋がるという。また、住宅のリフォームにもラフンは用

いられる。配偶者、子ども、孫など、家族がともに暮らすことを志向するブルネイの穆斯林にとって、一世帯当たりの人数が増える傾向にあるため、それに応じて住宅を増築するのは一般的であるという。このようにラフンは、ブルネイの人々の生活に幅広く活用されているのである。

ラフンを提供するイスラーム銀行はこの手法の普及にとっても熱心である。その銀行でラフン部門を担当する女性責任者によると、ブルネイの穆斯林の多くは元来、従来の質による借金に抵抗感をもっていたという。彼女は、イスラーム型の質であるラフンの利点を知ってもらうことで、この抵抗感を払拭してラフンのサービスを拡大させたいと意気込んだ。また彼女は丁寧かつ力強い口調で、ブルネイがイスラーム経済に期待を寄せる中、ラフンが経済生活においてさらに重要な役割を担っていくという将来展望を熱く私に語ってくれた。気付けば朝から始めたインタビューは正午過ぎになるまで続いていた。

イスラーム銀行でのインタビューを終えた後、私が宿泊していた大学の寮から金融機関のオフィスまで送迎してくれた友人が、帰路の車中にてふと思いついたように言った。

「今までのブルネイでは、額の大きいお金が必要になったら銀行から借りて、そうでなければ家族から借りるのが一般的だった。でも少額のお金を借りるうえで、ラフンという選択肢ができてきた。ラフンは、あくまで少しづつではあるけどブルネイの人々に認知され始めてきている。これは、この国で新しい動きなんじゃないかな。」

「新しい動き」という言葉に、私は引っかけた。ブルネイの経済発展については、その経済構造から石油・天然ガス中心の資源依存という面のみが強調されており、その他の動向は軽視されがちである。確かに、国内総生産の大部分を占める鉱業を抜きにブルネイ経済を語ることはできないだろう。しかし、一方でブルネイは、その国教であるイスラームにもとづいた経済発展にかなり本腰を入れ始めている。その代表が、イスラーム金融、そしてラフンなのである。非石油・天然ガス分野の発展という国家レベルの開発戦略において、イスラーム金融の発展は、資源の枯渇

に備えたブルネイ経済の新しい試みといえるのではないか。

冒頭で述べたように、経済分野におけるブルネイと日本との関係は強い。しかしながら、日本におけるブルネイの認知度は、他の東南アジア諸国に比べて極めて低いように感じられる。ブルネイ経済においては、石油・天然ガスへの依存というイメージが強く、その分析は一面的な理解に止まっているといえる。しかし、イスラーム経済という観点からブルネイ経済の特徴を考えれば、これまでと違ったイメージを描くことができるのではないだろうか。